

～対話（ダイアログ）による協働のまちづくり～ の結果

1 目的

「安全で安心して住めるまち」、「元気に楽しく暮らせるまち」、「地域の魅力を活かしたまち」。

地域の皆さんが進めるまちづくりには、様々な思いが込められています。

まちづくりは、地域の皆さんが主体となり、自治会、まちづくり団体や商工等の団体、行政などが連携・協働することで、より大きな効果を発揮します。

今回、地域の特性を生かした「対話（ダイアログ）による協働のまちづくり」をテーマに、基調講演や、道路等の整備や景観形成などの協働のまちづくりを実践されている方からの活動紹介を通じ、協働によるまちづくりについて、皆さんとともに考えます。

2 プログラム

13:00 開会

あいさつ （県土整備部 渡辺克己次長）
（明和町 中井幸充町長）

13:10～ 第1部 基調講演

『市民との対話による協働のまちづくり』

講師：西原 茂樹氏

（静岡県 牧之原市 市長）

14:10～

活動紹介

《協働によるまちづくり活動の紹介》

①『史跡齋宮跡を生かした協創のまちづくり事例』

永島 喬氏

（明和町 史跡齋宮跡・伊勢街道まちづくり会 会長）

②『景観まちづくりプロジェクト事業』

三重県 県土整備部 景観まちづくり課

14:50～ 第2部 交流会

参加者の方は、6人から8人のAからGまでの7班に分かれ、交流及び意見交換を実施。

【コーディネーター】

加藤 武志氏（まち楽房有限会社 代表取締役）

【コメンテーター】

西原 茂樹氏（静岡県 牧之原市 市長）

浅野 聡氏（三重大学大学院工学研究科 准教授）

3 実施内容

(1) 基調講演

『市民との対話による協働のまちづくり』 講師：西原茂樹氏（静岡県牧之原市 市長）

基調講演の様子



(牧之原市の概要)

- ・人口：46,814人 面積：111.69k m² 静岡県中部に位置し、お茶の栽培が盛ん。スズキ自動車の工場もあり工業も盛ん。富士山静岡空港も牧之原市にある。

(失敗からはじまった協働)

- ・「牧之原市から国を変える！」をスローガンに市民参加と協働を推進するとマニフェストを掲げ市長に就任する。
- ・市長就任後、困っている人達が集まって、みんなで望ましい解決方法を考える検討の場「フォーラムまきのほら」を開設。
- ・多くの市民が環境、教育、福祉の観点から議論し参加の輪が広まった。市民参加と協働を推進するなか、しかし、回を追うごとに参加者が激減した。なぜ。一人だけが話す、意見を頭から否定される、参加しても楽しくない。etc。

(市民ファシリテーターの養成)

- ・楽しく参加できる場を作らなくては。
- ・試行錯誤によって、※市民ファシリテーターの養成にたどり着くことができた。

※会議やプロジェクトの推進において、中立な立場を保ち、議論の交通整理をして参加者の能力を引き出し、舵をとる役割を担うひとをファシリテーターと呼びます。ファシリテーターは決定権を持たないことから、会議における議長とは大きく違っていています。あくまで、知恵とやる気を引き出す、コミュニケーションの場を創造し、中立な立場でプロセスを管理する役割となります。

(市民ファシリテーターの登場により動き出した対話による協働)

- ・市民ファシリテーターの活躍の場が必要。
- ・自治会を中心に男女協働サロンの開設へ。
- ・男女、年齢、あらゆる世代階層で。気軽に、楽しく、中身濃く。
- ・サロンのルールは、自分ばかり話しません、頭から否定しません、楽しい雰囲気大切に

にします。

(市民との対話を生かすことにより自治基本条例、津波防災まちづくり計画をつくる)

- ・津波防災まちづくり計画の策定にあたっては、5地区で男女協働サロンを50回開催(10回/地区)
- ・市長自らも参加することで、市民の方に重要な場であるという認識を持ってもらった。
- ・行政主導の計画ではなく、市民自らが策定に携わることで計画に血肉が通った。実効性のある計画を作り上げる。

(これからの牧之原市へ)

- ・地域を理解して愛着を深めていく人材を育成するため、市と高校と県教委や大学と連携して地域リーダー育成プロジェクトを平成27年からスタート。

(協働のきも)

- ・人が行動を起こすためには、学んで、気づいて、共感して、してあげて・してもらって、ありがとう、幸せ、という対話のプロセスが必要。
- ・人と人、組織と組織、つながって重なって、互いの力を引き出しあいます。

(協働のまちづくり まとめ)

- ・重要な事は、市民と一緒に決める！！
- ・市民が主体になり、皆でやる気を出してまちづくりに取り組む！！
- ・人はだれでも主役になれる！！
- ・一億総活躍社会は、国民が主役になってやる気になるようにしてあげること！！

会場の様子



(2) 活動紹介

《協働によるまちづくり活動の紹介》

①史跡齋宮跡を生かした協創のまちづくり事例

永島 喬氏（明和町 史跡齋宮跡・伊勢街道まちづくり会 会長）

活動紹介の様子



- ・史跡齋宮跡・伊勢街道まちづくり会は、平成19年11月、地域資源である「伊勢街道」の修景整備をきっかけに、歴史や街道の特徴を活かし、暮らしやすいまちづくりと、来訪者にも魅力あるまちづくりをめざした住民組織として設立された。2年間かけて伊勢街道沿いの史跡など45ヶ所を調査し伊勢街道散策マップの作成、齋王にまつわる紙芝居を創作する。
- ・伊勢街道の歴史をまとめた冊子「伊勢街道ものがたり」を作成した。実際に現地を案内する、住民を対象とした伊勢街道ウォーク会(まち歩き)も開催するなどして、地域の魅力を再発見する活動も行っている。

②景観まちづくりプロジェクト事業

三重県県土整備部景観まちづくり課

- ・みえ県民カビジョンにおける協働・協創について説明
- ・景観まちづくりプロジェクト事業の概要説明を行い、地域住民と行政の関わり方や県内の官民協働による修景整備の取組事例を紹介

(3) 交流会

【コーディネーター】 加藤 武志氏（まち楽房有限会社 代表取締役）

【コメンテーター】 西原 茂樹氏（静岡県 牧之原市 市長）

浅野 聡氏（三重大学大学院工学研究科 准教授）

①アイスブレイク

- ・まず初めに、まち楽房有限会社 加藤 武志代表取締役によるコーディネートのもと、

参加者同士の緊張をほぐし、話しやすい場を作る目的で、全員参加のアイスブレイクを行った。

- 全員が輪になり、まずは点呼。続いて、全員が誕生日順に並び替わる。いろいろな人に誕生日を聞かないと自分の場所がわからない。自分と同じ誕生日で話が弾んでいる方たちもちらほら。最後は、二人一組となり、相手の似顔絵を書いた。その似顔絵は相手の名札になるので、みんな真剣に似顔絵を書きました。これでリラックスして交流会に望むことができた。

アイスブレイクの様子



②「対話による協働。私たちならこんな風に進めたいナ」をテーマに7班に別れディスカッション

- まず初めに、①名前・団体名、活動内容を「ひとこと」で！②わたしの団体や地域の自慢（おススメは？）、③マイブーム（わたし個人の趣味や特技は？）、④本日の基調講演や事例紹介で印象に残ったこと、今後活かそうなことをそれぞれ発表。
- 加藤さんからは、「対話の中から得られた気づきを発表し形にすることで、共有することが大切。」との話があり、各班の代表者から発表。
- D班：女性の参加、世代間の問題、対話への参加が低い女性や30代が何を必要としているのか、いかにその人たちのニーズを引き出すのか。リサーチが大切。
- B班：それぞれの地域で活動の温度差がある。消防団活動、イベントをやっている。イベント際には来場者との対話の時間を盛り込む。それぞれの地域に帰って実践していこう。
- C班：西原市長にすべてのまちの首長になってもらうといいのですが、無理なので。社会福祉協議会、PTAやボランティア団体など横のつながりを作る。互いの団体を認め合い、来て楽しいという対話を。
- A班：若い人の参加が低いが、若い人に声をかけていく、継続が大切。小さなグループごとに色々なことをしている。それぞれに任せよう。その小さな活動が、いずれは大きなことができる。
- E班：最近、祭りがなくなってきた。コミュニティを再生していこう。若手ばかりに

まかせないで、若手は地域づくりのエンジン。みんなが支援していくことが大事。まずは、近所から始めて広げていこう。

- G班：日頃から6人のメンバーはまちづくりに取り組んでいる。話し合いの中では2点。まず、テーマによる対話の場合の進め方では、テーマに対する周知を主催者が丁寧に説明することが大事。もう一点は参加者が少ないという悩み、命に関わることや生活に身近なテーマは、参加者もイメージしやすく参加しやすい。
- F班：対話は必要という前提で議論。反対意見も理由がある、そこを丁寧に聞く姿勢が大切。高齢者は利他主義、若い人は利己主義なので楽しいこと面白いことも必要では。対話のメンバーが固定化されている。一度参加するとやめにくいことも。参加への出入りがし易いということも大事。

交流会の様子



(市長のお話に関する感想) コメンテーター 浅野 聡 三重大学准教授

- ・現場に自らで向き現場目線でお話ができる数少ない首長。日頃から勉強されていないとできないこと。
- ・協働の基本のルール的重要性を認識されている。一人だけ話してはいけない。偏った見方をしてはいけない。人の意見を否定しない。楽しく話ができる場作り。市長さん自らが初めにこの点をお話されたことは凄い。
- ・そのために、市民ファシリテーターの養成という人材育成を行うことも素晴らしいのですが、普通は人材育成して終わり。県内でも10年ぐらい前から人材育成を行ってきたが、活躍する場を見つけた人は活躍されている。そうでない人がいる。そこで終わらないのが牧之原市。養成された人材が活躍する場もセットでしっかり設けている。
- ・政策の中身が素晴らしい。特に、津波防災まちづくり計画に取り組みされた先進性。
- ・まちづくりのステップアップには、まちづくりの仕組みを作ることが大切。市民参加の基本となる条例があると良い。その他にも、まちづくりファンドも重要。単年度の予算ではなく、中長期的な視点でまちづくりに取り組むことができる。首長が変わっても残る。
- ・加藤さんのファシリテーションはどうでしたか。上手でしょう。素晴らしい。初めてお会いする人達でもリラックスした環境の中で、傾聴の姿勢、場作りをしていただいた。押し付けの協働にならないように、協働の基本についてアイスブレイクによる加藤さんからのメッセージを感じた。いきなり向き合って話をするよりも、入り口の重要性をわからせてくれた。プロの持っている技術。
- ・皆さんのお話の中で、特に若い世代も参加をという話が聞こえた。次世代を担う若い世代の意見をまちづくりに取り入れる仕組み、三重県でも出来ればと思います。

(全体を通じた感想) 明和町 中井町長

- ・明和町でもそれぞれの地区で地域の人が参加する防災会議を実施しているところです。やはり若い人達を会議の中に引き込むことが難しいことが悩み。今日は大変参考となる色々なお話をいただき是非取り入れていきたい。特に話をし易い雰囲気づくりの大切さ、対話によるまちづくりの取組、素晴らしかったです。明和町の平安時代の復元建物のさいくう平安の杜でシンポジウムを開催いただき感謝いたします。

まとめ

